

題目「民主的家族における対話と親密性の両立可能性について：1950年代の家族論を中心に」

○栗村亜寿香（京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程）

【研究目的と背景】本発表は、家族の対話と親密性という視点から、主に1950年代の家族に関する議論を検討するものである。50年代は、戦後の新憲法施行と民法改正により戦前の家制度が廃止され、法学者や社会学者から家族の民主化が提唱された。彼らが戦前の封建的な家制度と対比させ、家族成員の権利意識の確立、成員間の平等や自発的愛情などを説いたことはよく知られている。本発表で着目するのは、家族成員に権利意識が生まれ自己主張が認められた“その先”に生じざるをえない家族内の意見対立について、一部の民主化論者が認識していた点である。家族の民主化が進めば万事うまくゆくわけではなく、そうした自律した個人同士がいかに家族の紐帯を維持しようのかという次なる課題に取り組んでいたのである。

なお、家族の対話と親密性の両立可能性の問題は当時固有のものではなく、「家族の個人化」や女性の社会進出が進展し、またさまざまな家族問題が指摘された80年代頃にも浮上した。家族社会学においては、家族を含むライフスタイルを個人が「選択する」という視点が導入され、それにあたって家族内での対話を通じた合意形成が不可欠であることが強調されるようになった（山田昌弘 2004）。また心理学や精神医学の臨床現場からは、対話の欠如が家族問題の一因であることが指摘されている（河合隼雄 1980）。ギデنزが心理学的知見をふまえ、「共依存」関係と対比させて「私的領域の民主化」を説いたのもこの時期である（Giddens, A, 1992=1995）。これらの議論は親密な関係における自律や対話の必要性を規範的に説きながら、同時にそれがいかに困難であるかを論じている。自律や平等といった価値を手放さずに、他者と親しい関係を形成することを目指すのであれば、自律や対話と両立可能な親密性がいかなるものであるのかを検討する必要があるだろう。本発表では戦後の家族に関する議論のなかにその手掛かりを見出そうとするものである（80年代の議論の検討は他日を期したい）。

【研究方法】本研究では、『現代家族講座』（1955-6年）を主に底本にした『戦後家族社会学文献選集第I期』のうち民主的家族（近代家族）に関する論考を主な検討対象とする。そのなかでも先行研究で参照されることも多い磯野富士子の議論を重点的に取り上げる。加えて、50年代に農村女性との交流から新たな家族像を描き出した溝上泰子の議論も検討する。磯野と溝上の議論は詳細においては異なるものの類似した着眼点が多く、とりわけ家族の対話と親密性の両立可能性に関して現代的意義を有する重要な論点を提起していると考えられる。

なお近年、家族の民主化論に関する研究は進展を見せており、家族内対立に対する民主化論者の認識についても言及がされはじめている（本多真隆 2013）。これらの先行研究も参照し検討を進める。

【考察】磯野と溝上の議論から、家族の対話は親密性を阻害するのではなく、むしろ親密性を構成する一要素であるという見方を導いた。これまでの研究では、自他の差異の認識や理性的論証を必要とする対話は、「言わなくてもわかる」親密な関係とは相容れないとみなされることが多かったが（田村哲樹 2017）、本研究ではこうした従来の見方とは異なる視点を提供する。また、ごく簡単ではあるがこうした磯野や溝上の視点とフェミニズム等の現代的議論との親近性にも言及する。

【文献】・Giddens, A, 1992, *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*, Cambridge: Polity Press. =1995, 松尾精文・松川昭子訳『親密性の変容』而立書房

・河合隼雄, 1980, 『家族問題を考える』講談社

・本多真隆, 2013, 「戦後民主化と家族の情緒——「家族制度」と「民主主義的家族」の対比を中心に——」『家族社会学研究』25(1), 64-75

・田村哲樹, 2017, 『熟議民主主義の困難——その乗り越え方の政治理論的考察』ナカニシヤ出版

・山田昌弘, 2004, 「家族の個人化」『社会学評論』54(4): 341-54

（キーワード：民主的家族、対話、親密性）